「短歌二十題」

東京都　三枝信義

戦友(とも)　また　戦後を逝きて
　シベリヤに死なしめし数　戦慄となる

三十余年生きとびて　仰ぐ
　斎場の冬木　生々し　シベリヤの獄

極寒のラーゲルの朝
　帽ふかき兵らを　包む　霧　重くして

兵　いく体　氷柱のごとく　積み上げて
　シベリヤを挽く　労働の名に

煤けたる雪　掻きあつめ覆ひけり
　シベリヤに　わが　兵は死にけり

凍て土を　融かす火　夜な夜な　ゆらめきて
　明日は　新墓に　骸うつさむ

狭き湾に　逐ひ込まれたる海豚らよ
　蘇りくる　俘虜　われのシベリヤ

敵国の街に上れる赤き月
　虜因の恥の　身に沁むるなり

いまはのきは　シベリヤの野の赤き実を
　舌うち食(お)しぬ　足らえるや　否

猿(ましら)のごと頬こけ落ちし　汝れは　はや
　まなこ見開き　母呼び　絶えぬ

かかる死の　徒にはあらじ
　にほはしき処女娶りて　縁に　連なりぬ

シベリヤに葬らふことの　難くして
　葬り送りし　二十歳ののち

関朴翁　霊こめそむる　慰霊　の文字仰げば
　自づ　安らぎのあり

霊前の柿の若葉の　色冴えて
　春の昼を　ただに　額俯す

霊前に　想ひめぐらす額の上に
　霏々と舞ひちる　桜花浴みをり

かずかずの死にざまに　会ひぬ
　シベリヤの曠野埋むる　蒲公英の花

堪へがたく黙ふかき時も　過ぎ去りぬ
　顕ちくる戦友の俤の　ゆたけさ

巨き碑は　据はりて永久に　ゆるがざらむ
　石のはだへに　苔の　敷く見ゆ

シベリヤに　ひ弱き兵ら　ノルマとして
　凍てし糞尿の塔　壊つなり

捕虜棟のペチカを　囲み　鼻しかむ
　糞尿の氷片染むる　兵ゐて